
明と暗の物語～失恋短編集～

柊和海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明と暗の物語～失恋短編集～

【Zコード】

Z0337Z

【作者名】

柊和海

【あらすじ】

私が笑う陰で、泣く者が居るかも知れない。

貴方が笑う陰で、喪失感に苛まれる者が居るかも知れない。

それは良でもなければ否でもない、当たり前の日常。

こんな世界の中で、泣く者に焦点を当てた脆く儂くも、穏やかで温かい物語。

プロローグ～始める～

笑う者が居れば、泣く者が居る。

無意識に幸せを「与える」ことがあれば、無意識に不幸を「与える」ともある。

全てが表裏一体の世界。

例えば、同じクラスの隣の席の女の子。

彼女には彼氏が居るかも知れない、しかし彼女に好意を寄せている男の子も居るかも知れない。

例えば、披露宴で微笑む新郎。

隣には同じく幸せそうに微笑む新婦が居ながら、同席している幼馴染みは昔から彼を想つて居たのかも知れない。

例えば、電車で毎朝見掛ける彼。

例えば、よく行くショッピングの可愛い店員さん。

例えば、職場の上司。

例えば、高校の後輩。

人の数だけ、喜びから生まれる笑顔があり、悲しみから生まれる涙

がある。

これは感情と呼ばれる、温かくも悲しい物を持つ者の、ほんの一部を紹介する物語。

大学生も四回生になると、自由な時間が多くなる。
就職も既に内定が決まっており、最低限必要な単位も習得は終わった。

時間に余裕が出来た今、一番精が出るのはアルバイト。
それも今日は突然休みになつたため、俺はとにかく暇を持て余している。

「あら智、今日はバイトじゃないの」

リビングのソファで何をするでもなく、ただ意味もなくテレビの音
声を聞き流しながらぼーっとしていた俺に声を掛けたのは、買い物
から帰った母だった。

俺は簡潔に休みになつたというだけ伝え、携帯を開く。
その行為に意味など無かつたが、ただ手持ち無沙汰を感じていた。

「そうそう、この間、恵ちゃんに会ったわよ」

母はそう言いながら、いつの間に準備したのか、一人分の紅茶をテ
ーブルに並べ、ソファに腰を下ろした。

母が大量の砂糖を紅茶に入れるのを横目で見ながら、突然出てきた
懐かしい名前に胸が熱くなるのを感じた。

石川恵。

小学生の頃に知り合い、中学、高校と共に通つた幼馴染み。
そして……俺が今までに付き合つた唯一無二の女性だった。

「おはよう、智っ！」

毎朝明るい笑顔で家まで迎えに来る恵。

彼女から告白されて付き合い始めたのは、中学一年になる春のことだった。

緊張気味に、それでも真っ直ぐな瞳で俺を見つめながら言った、「彼女にしてください」と言つ言葉が、今でも鮮明に蘇る。

普段の明るさ、気の強さからは想像も出来ないような緊張した表情、そして微かに震える声、そんな恵を見て、俺は返事をする前に抱き締めていた。

「デートらしい」「デートはほとんどしたことが無かった。

毎日の上下校、休日はどちらかの家でゲームをしたりパソコンを触つたり……。

二人で何かをすることは少なかつたが、同じ時間と空間を共有しているだけで満足だった。

それは恵にとつても同じようで、文句を言つ「とも機嫌を悪くすることも、只の一度も無かった。

高校生になりクラスが離れても、上下校はずつと一緒に、昼休みには一人で屋上で弁当を食べたりもした。

初めは新しい友人達に冷やかされたりもしたが、俺達にとつては当たり前で、一番居心地の良い時間であった。

この頃には、初体験も済ませていた。

お互いに初めての恋人で緊張や不安もあった。

それでも初めて一つになった瞬間は感動したし、恵が涙目で「嬉しい」と呟いているのを見てとにかく愛しく感じた。

高校を卒業し、俺達は別々の進路を歩むことになる。

俺は県外の大学へ、恵は地元で就職することになった。

この時の俺達には、離れる不安なんて無かつた。

それでも、別れは想像以上に早く訪れた。

「智の気持ちがわからない」

卒業後、当たり前に会えない日々が続いていた。
夏休みが目前だったにも関わらず、俺達はお互いデートの計画も立てずに居た。

その結果なのだろうか、恵は限界を感じたようで、別れたいと言つ旨のメールを送つて来た。

新しい土地での大学生活も忙しく、俺も余裕がなかつたため、了承の返事を返したきり俺達は連絡を取り合わなくなつた。

少しづつ生活に慣れてきた頃、俺は一気に後悔した。
今ならまだ間に合うかも知れないと思い連絡を取ろうともしたが、アドレスも番号も既に変わつていた。

それでもいつか、最後には戻つて来てくれるかも知れない……。

あれから四年近くも経つてゐるのに、未だにその期待を捨て切れず
に居た。

「恵……元気そうだつた？」

俺は冷静を装つて母に問い合わせた。

心の中では会いたい、声が聞きたい、また昔のよつと笑いかけてほしい、そんな気持ちでいっぱいだつた。

四年しか経っていないけれど、恵は変わったかな、変わつていなければ良いな……。

そんな期待と不安は、脆くもすぐに崩れ去った。

「元気そだつたわよ、可愛い恵ちゃん抱いて……恵ちゃん、結婚してたのね。知らなかつたわ」

嬉しそうに話す母とは裏腹に、俺は言に表しようのない喪失感に襲われた。

そんな気持ちを悟られないように短く「そうか」とだけ答え、飲み終わつた紅茶のカップをシンクへ置き、そのまま部屋へ戻つた。

結婚…… そつか、子どもも産まれたのか……。

ベッドに座つた俺の太股に一滴の水滴が落ちたとき、漸く自分が涙を流していることに気が付いた。

恵から別れたいと言われてから一度も流すことの無かつた涙が、次から次へと溢れ出てきた。

四年という時間は、二人の関係を修復させるには剩りにも長過ぎたようだ。

戻りたいと思つて居た場所は、もう姿を変えてしまつていた。

「幸せにしてもらえよ」

静かな部屋に、精一杯の餓の言葉が小さく響き、漸く俺の長い初恋が、終わりを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0337z/>

明と暗の物語～失恋短編集～

2011年12月1日12時51分発行